博 士 学 位 論 文

内容の要旨及び審査結果の要旨

令和５年度

京都外国語大学

はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を目的として、令和 6 年 3 月 15 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

氏　　名	李　迅
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第28号
学位授与の日付	令和6年3月15日
学位授与の条件	本学学位規程第3条3号該当
学位論文題目	教師の問いかけとチャットによる学習者の反応との分析　中国における同期型オンライン初級日本語授業の録画観察から
論文審査委員	主査　教授　中西　久実子
	副査　教授　梶川　裕司
	副査　教授　森　篤嗣（武庫川女子大学）

論文内容の要旨

本博士学位請求論文（以下、本論文）は、本論文は、中国における同期型オンライン初級日本語授業を対象とし、教師の問いかけの種類また、問いかけのストラテジーの実態を明らかにすることにより、教師の問いかけとチャットによる学習者の反応との関係を明らかにするものである。本論文の研究課題は次のとおりである。研究課題 1は「教師の問いかけの種類は学習者の反応に影響するか。影響するとすれば、教師は何をすればいいのか」で、研究課題 2は「教師の問いかけのストラテジーは学習者の反応に影響するか。影響するとすれば、教師は何をすればいいのか」である。

本論文の構成は次の通りである。第 2章では先行研究を概観し、第 3章では本論文の方法論が示される。第 4 章から第 7 章までが、研究課題 1 に対する結果であり、第 8 章から第 10 章までが、研究課題2に対する結果である。

第 1章では、対象とする同期型オンライン初級日本語授業の特徴と教師の問いかけの重要性について述べられている。

第 2 章では、先行研究を踏まえて、本論文における教師の問いかけの定義が示されている。本論文では、教師の問いかけとは「①言語形式からイントネーションが上昇する文であること、②教師の言語行為から教師が何か言った後で時間の空白があること、③機能からチャットに学習者が何か書き込むという反応がある」という 3つの条件を全て当てはまるものと定義され、教師の問いかけは、疑問詞、目的、学習者の能力や内容など様々な視点から

分類できることが述べられている。教師の問いかけのストラテジーは学習者の知識の把握、授業への参加意欲、教師が学習者との交流や教師の問いかけの効果に関わるということが先行研究ですでに明らかにされているが、オンライン授業において、教師が学習者の表情から学習者の反応を把握することは難しい。そのため、これを解決できる教師の問いかけについての先行研究はないという。そこで、本論文ではチャットで学習者が書き込むという反応に着目し、チャットでの学習者の反応人数と反応時間に注目することにしたという研究方法の選択の根拠が示されている。

第 3 章では、従来の研究で使用されてきた研究方法、分析方法と本論文が収集したデータの詳細について述べられている。本論文では、同期型オンライン初級日本語授業として中国の 3 つのオンライン言語学校（A、B、C）の授業録画またフリーランス教師 1 名の授業録画を対象とし、総計 25 コマの授業の録画を収集し、表 1 で示された分析方法で分析されている。

第 4 章では、問いかけの作成の視点から教師の問いかけを分類し、チャットによる学習者の反応人数・反応時間との関係が明らかにされている。具体的には、教師の問いかけを「知識型問いかけ」と「授業進度型問いかけ」に分類し、「知識型問いかけ」と「授業進度型問いかけ」の使用状況、チ ャットでの学習者の反応人数・反応時間との関係を分析されている。分析の結果、「知識型問いかけ」が圧倒的に使用された。チャットによる学習者の反応について、「授業進度型問いかけ」に対して、チャットによる学習者の反応人数が多く、反応時間が短いことが指摘されている。「授業進度型問いかけ」は、問う内容比較的簡単であり、学習者に要求する回答方式が簡潔であり、指示文と一緒に行うという特徴を持つためである。この分析結果から、学習者の反応が十分でない場合には、教師が「授業進度型問いかけ」を使用することで、チャットによる学習者の反応を促すことができると主張されている。従来の研究では、「授業進度型問いかけ」の存在は言及されているが、使用状況と学習者の反応への効果は述べられていない。これに対して、本章が明らかにした結果は新規性があると考えられる。しかし、実際の授業において、教師は「授業進度型問いかけ」のみを行うことはできない。そこで、「授業型問いかけ」に対して、学習者の反応を促すことができる可能性がある「知識型問いかけ」の有効性が論じられる。

第 5 章では、知識型問いかけの複雑さとチャットによる学習者の反応人数・反応時間との関係が明らかにされている。本論文では、学習者のチャットの書き込みの複雑さを基準にして教師の問いかけの複雑さは、「単語で書き込んでいる」問いかけ、「文節で書き込んでいる」問いかけ、「文で書き込んでいる」に分類されている。分析の結果、これらの分布状況について、１）「単語で書き込んでいる」問いかけの回数が最も多かった、２）チャットによる学習者の反応人数については、問いかけの複雑さの間に有意な差が見られなかった、３）チャットによる学習者の反応時間については、「単語で書き込んでいる」問いかけに対して、チャットによる学習者の反応時間が比較的に短い、ということが明らかにされている。本章で明らかにした結果に基づき、授業中、チャットでの学習者の反応が不十分ではない場合、

教師が単語で書き込む問いかけに変更することで、学習者の反応を促すことができると言える。

第 6 章では、認知レベルを基準にし、教師の問いかけの知識内容を分類し、その分類された知識内容とチャットによる学習者の反応人数・反応時間との関係が明らかにされている。具体的には、教師の問いかけの知識内容を「知識の認知」「知識の理解」「知識の応用・分析」に分類し、分類された知識内容の使用状況やチャットでの学習者の反応との関係が分析されている。分析の結果、「知識の応用・分析」が多く使用されており、反応人数については、3 つの知識内容の間にチャットによる学習者の反応人数は統計的に差がないこと、そして、反応時間については、「知識の応用・分析」の問いかけに対してチャットでの学習者の反応時間が長いことが明らかにされている。

第 7 章では、教師の問いかけにおける複雑さと知識内容の両方を考慮し、量的なデータを用いてチャットでの学習者の反応との関係を詳細に明らかにすることの重要性が示されている。具体的には、まず、知識内容が「知識の認知」または、「知識の理解」の場合、「単語で書き込んでいる」問いかけが多く見られ、他方、知識内容が「知識の応用・分析」の場合は、「文節で書き込んでいる」または、「文で書き込んでいる」問いかけが多く見られるという。また、チャットによる学習者の反応人数・反応時間との関係の結果については、①複雑さ及び知識内容の効果はチャットによる学習者の反応人数に統計的に影響を与えなかったが、同じ複雑さ及び知識内容の問いかけの中で、問いかけのストラテジーを使用される問いかけに対して、チャットによる学習者の反応人数が多くなる傾向があること、そして、②問いかけの知識内容が同じ場合、「単語で書き込んでいる」問いかけに対してチャットによる学習者の反応時間が短いことが指摘されている。

第 8 章においては、教師が使用した問いかけのストラテジーを「指示」「ヒント」「繰り返し」「言い換え」「選択肢を与える」という 5 つに分類し、これらの問いかけのストラテジーの使用状況が分析されている。分析の結果、「ヒント」と「繰り返し」が多く使用されたこと、そして、反応人数については、「ヒント」よりも「指示」に対して学習者の反応人数が多い傾向が見られたことが指摘されている。また、5 つの問いかけのストラテジーの中で「選択肢を与える」ストラテジーに対しては、学習者の反応人数が多く見られたが、反応時間については、問いかけのストラテジーの効果が統計的に見られなかったことが示されている。更に、「知識の応用・分析」の問いかけのストラテジーの中で、「ヒント」、「繰り返し」より「選択肢を与える」ストラテジーを使用すると、チャットによる学習者の反応人数が多くなる傾向があることが指摘されている。これらの結果に基づき、学習者の反応が不十分な場合、教師は「指示」と「選択肢を与える」ストラテジーを適切に増やすことで、学習者の積極的な反応を促すことが提案されている。

第 9 章では、「繰り返し」の実態について分析されている。教師の繰り返しは、完全な「繰り返し」と一部の「繰り返し」に分けられ、更に、一部の「繰り返し」には、教師は問いかけの対象と疑問文を繰り返すという 2 つのパータンがあるが、疑問文と問いかけとの

関係については、疑問文の繰り返しは問いかけ文の後に行われることが多いという特徴が指摘されている。更に、教師は無意識的に問いかけを繰り返すと、チャットによる学習者の反応に効果がない可能性が高いことも明らかにされている。

第 10 章においては、学習者の反応が不十分の場合、教師はどのようなヒントを提供するのかについて述べられている。分析の結果、反応人数については、各ヒントの効果が統計的に見られなかったが、問いかけの対象が実質語の場合は、教師が「答え方」(「答えの語形/音声」) のヒントを提供する傾向があり、機能語の場合は、「学習者との関連」(「使用する場面」) のヒントが多く見られることが指摘されている。更に、文法については、教師が「答えの一部」のヒントを提供する傾向が見られることも指摘されている。

第 11 章では、1 コマの授業における問いかけの分布や連続的な問いかけの変化に関する分析がなされている。分析の結果、1）1 コマの授業において、教師が単語と文法を説明していた間には、よく問いかけをするが、練習や会話文を説明していた間には、あまり問いかけをしなかった傾向が見られたこと、2）1 コマの授業において、教師が連続的に同じ複雑さや知識内容の問いかけをすると、チャットによる学習者の反応が低下したり停滞したりするが、連続的に異なる複雑さや知識内容の問いかけをすると、チャットによる学習者の反応が増加すること、3）教師が 2 つ以上の問いかけのストラテジーを使用する際には、「繰り返し」と他のストラテジーを使用したケースが多いことが明らかにされている。

第 12 章では、チャットによる学習者の反応に影響するほかの要因、オンライン授業における学習者の特徴やチャットでの無反応について述べられている。その結果、成人日本語学習者に対しては、言葉に注意を払う必要があること、そして、表面的にはチャットでの反応がなくても、実は学習者が反応する可能性があることが指摘されている。

上記のように、本論文では、教師の問いかけの種類や問いかけのストラテジーとチャットでの学習者の反応との関係を詳細なデータをもとに分析されている。本論文で明らかになった成果はチャ ットによる学習者の反応が十分でない際に、教師が適切な対策を取るなどの提案として有効である。本論文はオンライン授業の特徴の 1 つであるチャットでの学習者の反応に着目し、チャットは学習者が緊張感を緩和できること、多くの学習者が回答する機会が対面授業より多くなること、教師が同時に学習者の反応を見られることなどのメリットを持つことも示しており、中国における初級レベルの日本語教育の実態を明らかにした点で学界に資する影響は大きい。

従来の研究では、学習者の回答によって問いかけを分類し、質的に学習者の反応との関係が分析されているが、量的に学習者の反応との関係を分析する研究は管見の限りあまりない。これに対して、本論文では客観的かつ定量的な結果を示すことができており、教師が問いかけを工夫することで学習者の反応を促進できる点や、数量的な分析の重要性について新しい視点を提供できるものとなっている。先行研究で，ひとくくりにされていた Closed Question など問いかけの内訳について， 中国における初級日本語同期型オンライン授業に限るとはいえ，データで明らかにしたところに本論文の意義がある。

口述試問

口述試問は、主査と学位申請者より本論文の概要の説明がなされた後、２名の学内審査員・１名の学外審査員から以下に示すような質疑・コメントが示され、申請者がそれに答える方式で進められた。

論文の内容については、本論文がチャットの反応が速く、反応人数が多ければ、学習者の習得が進んでいるという前提に立っているのかという質問が出された。また、対象となっている教師や日本語授業の質が担保されているのかといった質問もなされた。

分析方法については、反応時間についてもっとも速くチャットに書き込んだ学習者の時間が記録されているが、これを採用したことの妥当性を問う質問がなされた。また、チャットの書き込みについても単語で書き込む学習者が多いということの判断として数が多いことを基準にしているが、これを採用したことの妥当性についても質問があった。そして、反応時間が短くて反応人数が多いということは、教師の問いかけが簡単だということに過ぎないのではないかといった指摘もなされた。

更に、質的分析としてインタビューやアンケートが使用されるべきではなかったかといったことや、教室内発話をテキストマイニングして解析したり、アイトラッカーで学習者の動機の向上があったかを測るべきではなかったかという指摘もなされた。

上記の質疑応答の過程において、申請者は先行研究にも言及しながら自らの考えを根拠に基づいて主張できていた。そして、口述試問におけるすべての議論において、明快、かつ、堂々とした態度でよどみなく対応できていた。さらに、この論文では初級レベルの授業しか調査できなかったが、今後は他のレベルの授業のデータを拡充し、学習者の反応に影響を与えるほかの要因を探りたいという計画の可能性も示唆し、本論文の成果を踏まえて研究を発展させ、詳しく見ていく用意があると主張できていた。

審査結果

口述試問とその後の審査会での議論を総括すると、３人の審査員は本論文の一定の価値を評価した点で一致した。本論文は、オンライン授業において、教師の問いかけの種類また、問いかけのストラテジーの実態を明らかにすることにより、教師の問いかけとチャットによる学習者の反応との関係を明らかにした研究として評価できる。特に、ここのチャットの質的分析やチャットの前後の分析にまで踏み込み、新たな知見を導けたことは高く評価できる。ただ、論文の日本語表現に若干読みにくい点があるので、これについては、微調整を加えるべきことがコメントとして付された。

しかしながら、本論文は、オンライン授業のチャットの特徴という観点からだけでなく、対面の日本語授業における教師の問いかけやヒントの出し方という視点からも注目に値す

る研究となっており、今後は、このような観点からも議論が発展していくことが大いに期待できるものとなっている。

以上の諸点から、本論文は課程博士号の学位を授与するに値する論文であると認定する。